

時代  
挿画

俳家奇人談

中



~ 5  
2250  
2









昔者鳥醉藏此物也久矣後授之於白河鳥黑  
 鳥黑深秘而不置云往年予遊于奥羽而道經  
 其地竊得就鄉人而摹之今茲縮圖以補蓼太氏  
 蹟集 蕉翁真之脫漏而已 儀伴閑人



之りり

乎と

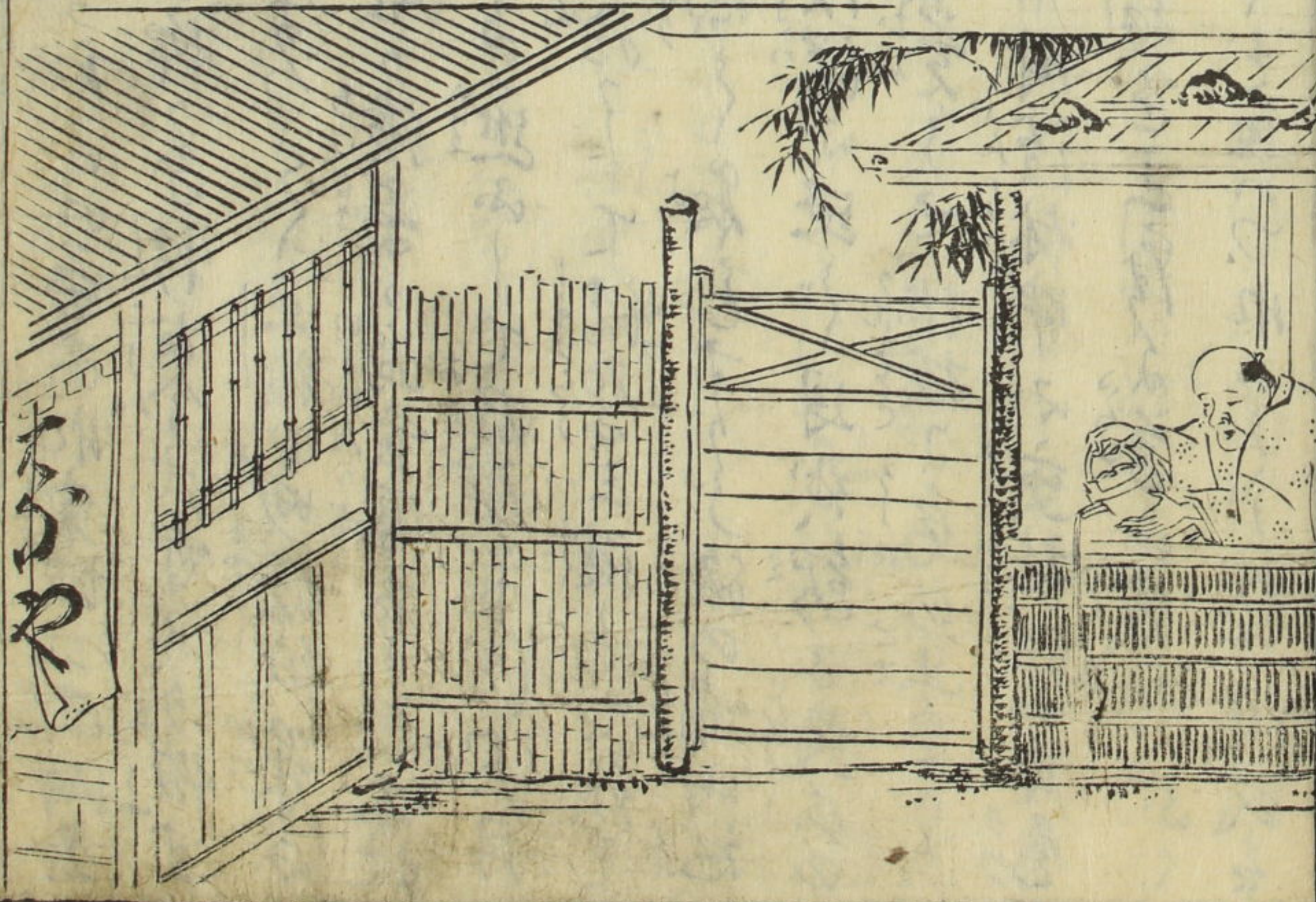
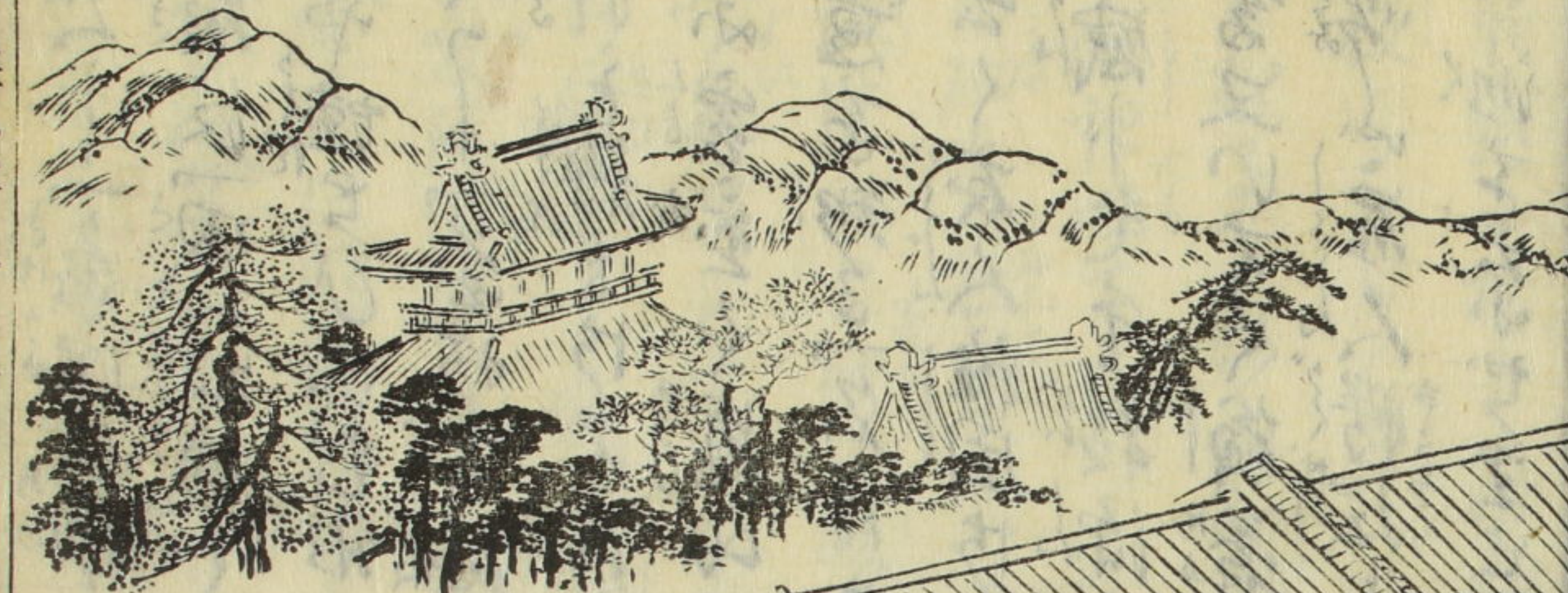
日

〃〃

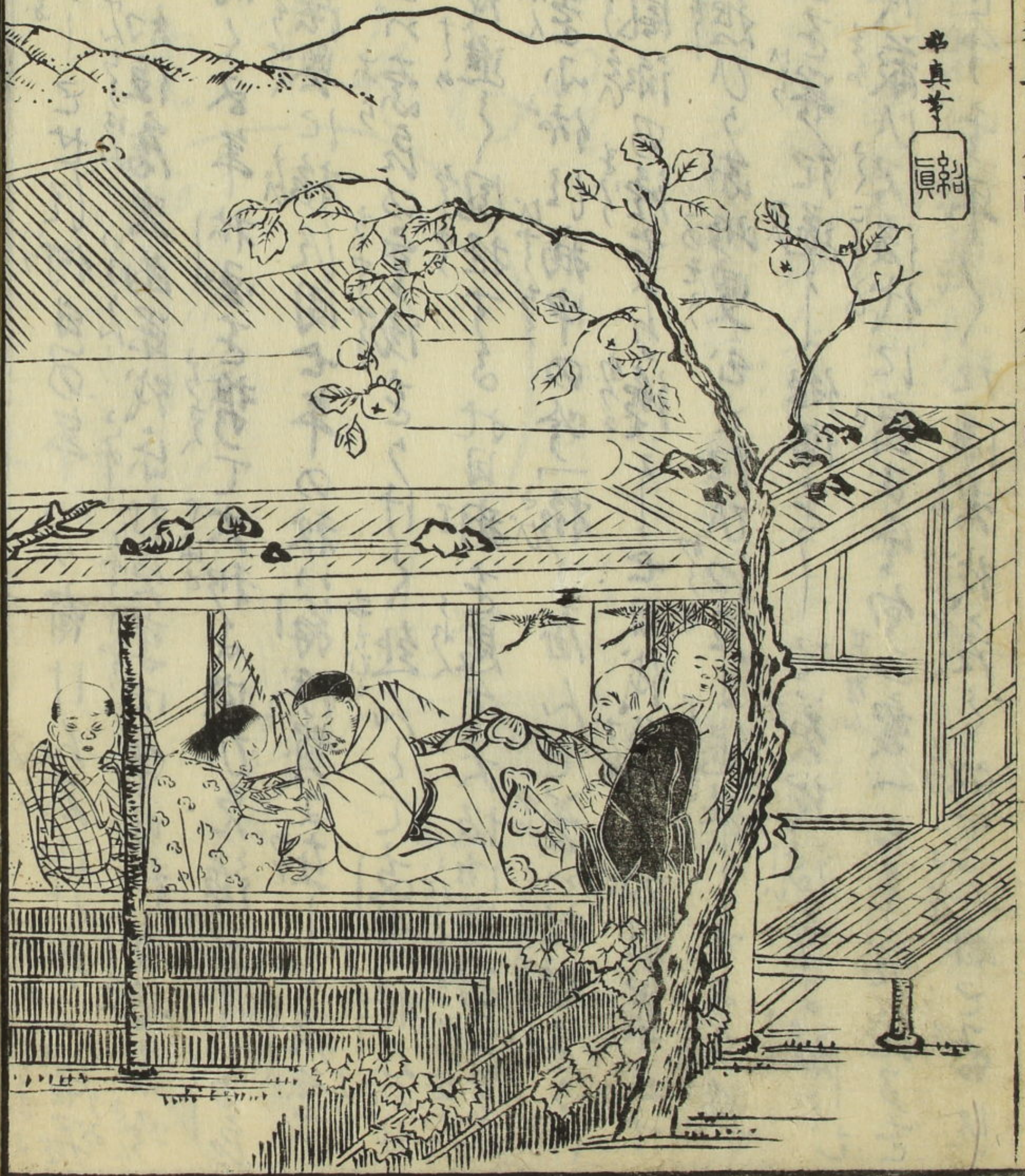


す家人も一とせは何もの年ふり有けん石山此奥又客居  
 して姑く幻住庵忠幽深哉亦む久享口年の秋鹿鳴忠吟  
 仍何里同く又年松玉を携て大移又遊びえ歸二年首良  
 を舉ぐ陸奥に移及同七年の秋ハ新修贊又在一う活益  
 招もあまの奈良の重傷をうけく起んとて支考修持哉  
 侍ハ歩哉進く風杜する此日病を患え大坂由崇亦そ居  
 賢が後室小休は病中の吟一移屋んで爰ハ枯壁をうけ  
 ほつる是風詠の終なり終る七日哉又く双は兼又十  
 有一嗚呼悲ひう亦此叟をこたび江左又龍舉してあり始て  
 司控の妙を著紀遠く一能満を一そ著哉待奇又終む  
 先亦人哉兼以沢後代に垂る空句正愛一ちうり終るを  
 後進察せし平くた家考哉又く以て三昧と存は





三



幸真幸  
真幸



秋ぞと一「象深の雨や西垣がぬふれを水東坡の西湖を  
 待小庭は「田一校抄くまはる柳うみ彩古今此奇あり催す  
 「古池や煙とひはむ水の音はあつとく玉燈が妙境紙筆ふ  
 流ぐり「益坊玄鐘より上階の浅茶より幽玄酒ち「一本此  
 下の汁と糖もけ久良うあそむる進んで皮厚くは「六月  
 や筆ふ雲とく嵐山此句句法して濃厚三復して後を  
 此旨意を知る「名月や池我同く秋とすぐる洛の嘯山記  
 して云く友人雅園は死又廣沢ふ進ぐ月我知る適其の  
 筆を感して筆精深ある哉嘗て己枯枝又鳥の止まらり  
 秋此意又いとく翁若く至「附澄林申ふ更狂は一日是  
 句我唱ふ友人愕然と「つるをよるふさふ我狂もふく  
 して一洒を奈せ里と「阿うくと因つれちくも秋の風或を

傳ふ翁感は拙く此句我はより風の字を山に留て北校了  
 示は校いなくいまと風此字の佳な味ふぬす翁驚を因く  
 我たるむる「妙み如地より子何り還り月く思はく「一本  
 病小淋和味を忘る「ふえ羅申符加別金城は形掛志分枝  
 体肉の砌り表亭小て「秋舎合何里「に「空意山海の珠  
 味を致けたり終は終る「後舎我約せん「は海い  
 はく今秋意とて有「心半此程の云はる「函ぐり「恨らくい  
 風種乃結ふ「我を深をよるん定めず或は種末「墨  
 癖此爰我結ひ或も山中「一村名を渡ぐ終るに形る珠  
 揚滋味あに風味の本意あらんやと拙「とそ他は如枝書  
 柳金寫此名我あせりも空寂海のは冬屋りち「は  
 ありてあり「十六巻のわづら小室は始り空院室の作古今



此篇の存りある者なり。その「源頼朝の遺筆」と云ふ一巻の巻  
 平穩中寓無限悲涼。互ちあはれず。晋子り雄高を擧する。或  
 殊り。其まを修く。後世人の福する。山路末を何や  
 ゆく。葉州一橋が帯をけり。と日の出る。山路く。是はけり。山を  
 目迄。高橋のけり。けい。あつ。偏よ。けり。ぬ人の。さよ。厚。た。た。の。木。橋  
 へ。さ。小。喰。水。り。一。巻。す。け。く。膏。膏。ら。り。一。出。北。超。一。今。め。ば。り。り  
 人も。年。よ。れ。初。阿。ぬ。ま。ま。ま。を。正。愛。つ。ち。り。は。深。く。味。い。す。ん。り。何。る  
 厚。り。く。す。ま。風。種。破。路。一。亡。一。愛。一。て。難。強。と。ち。り。再。愛。一。て  
 西。漢。五。言。と。あ。ま。三。愛。一。と。歌。行。雜。辨。と。ち。り。口。愛。一。と。沈。宋  
 律。詩。と。成。海。蓋。一。と。名。我。實。と。改。免。實。を。さ。小。和。け。り。る。も  
 本。和。和。奇。の。習。り。め。と。い。ひ。た。一。又。い。り。一。一。概。滿。北。連。奇。と。い。り  
 ば。何。一。と。て。西。海。難。波。津。の。浪。と。い。り。る。に。新。義。和。臣。一。み。り。れ。厚  
 ね。撲。ま。み。ど。ね。く。ま。り。る。一。廣。和。意。も。す。が。依。置。く。あ。と。い。り。る。よ  
 西。新。法。沙。一。深。き。沙。又。か。り。る。海。を。北。有。厚。り。堂。初。一。句。二。句。を。い  
 難。厚。り。宗。徳。宗。長。掛。河。の。城。と。け。く。一。出。虫。の。能。潜。と。我。句。舉。句  
 とい。ゆる。も。ち。り。只。云。控。ふ。り。宗。徳。守。武。等。大。難。波。集。飛。梅。子  
 句。我。撰。ぶ。と。い。り。ご。い。す。と。一。片。の。準。繩。と。云。は。り。る。我。抄。取  
 貞。徳。が。と。と。び。九。重。り。は。多。許。を。蒙。て。ち。り。そ。式。大。率  
 定。後。の。時。一。難。波。の。宗。因。古。風。を。感。破。一。新。作。を。撰。起。一。て  
 一時。の。晒。落。よ。ん。我。絶。倒。す。一。む。是。我。陰。林。と。稱。す。毎。い。す。と。宗  
 房。た。ま。一。は。その。風。又。何。人。で。よ。ま。北。吹。あ。り。一。が。柳。り。眼。ま。器  
 て。次。歌。集。を。撰。は。是。の。法。徳。が。一。百。五。十。年。七。百。許。稍。法。林。我。難。ま。ん。と  
 す。る。根。は。一。尺。ゆ。遠。一。松。律。の。風。骨。を。探。り。山。家。集。北。寂。寥。我  
 た。ら。り。は。一。函。玄。空。作。人。情。の。理。屈。を。離。る。は。れ。が。正。風。室。小

此篇の存りある者なり。その「源頼朝の遺筆」と云ふ一巻の巻  
 平穩中寓無限悲涼。互ちあはれず。晋子り雄高を擧する。或  
 殊り。其まを修く。後世人の福する。山路末を何や  
 ゆく。葉州一橋が帯をけり。と日の出る。山路く。是はけり。山を  
 目迄。高橋のけり。けい。あつ。偏よ。けり。ぬ人の。さよ。厚。た。た。の。木。橋  
 へ。さ。小。喰。水。り。一。巻。す。け。く。膏。膏。ら。り。一。出。北。超。一。今。め。ば。り。り  
 人も。年。よ。れ。初。阿。ぬ。ま。ま。ま。を。正。愛。つ。ち。り。は。深。く。味。い。す。ん。り。何。る  
 厚。り。く。す。ま。風。種。破。路。一。亡。一。愛。一。て。難。強。と。ち。り。再。愛。一。て  
 西。漢。五。言。と。あ。ま。三。愛。一。と。歌。行。雜。辨。と。ち。り。口。愛。一。と。沈。宋  
 律。詩。と。成。海。蓋。一。と。名。我。實。と。改。免。實。を。さ。小。和。け。り。る。も  
 本。和。和。奇。の。習。り。め。と。い。ひ。た。一。又。い。り。一。一。概。滿。北。連。奇。と。い。り  
 ば。何。一。と。て。西。海。難。波。津。の。浪。と。い。り。る。に。新。義。和。臣。一。み。り。れ。厚  
 ね。撲。ま。み。ど。ね。く。ま。り。る。一。廣。和。意。も。す。が。依。置。く。あ。と。い。り。る。よ  
 西。新。法。沙。一。深。き。沙。又。か。り。る。海。を。北。有。厚。り。堂。初。一。句。二。句。を。い  
 難。厚。り。宗。徳。宗。長。掛。河。の。城。と。け。く。一。出。虫。の。能。潜。と。我。句。舉。句  
 とい。ゆる。も。ち。り。只。云。控。ふ。り。宗。徳。守。武。等。大。難。波。集。飛。梅。子  
 句。我。撰。ぶ。と。い。り。ご。い。す。と。一。片。の。準。繩。と。云。は。り。る。我。抄。取  
 貞。徳。が。と。と。び。九。重。り。は。多。許。を。蒙。て。ち。り。そ。式。大。率  
 定。後。の。時。一。難。波。の。宗。因。古。風。を。感。破。一。新。作。を。撰。起。一。て  
 一時。の。晒。落。よ。ん。我。絶。倒。す。一。む。是。我。陰。林。と。稱。す。毎。い。す。と。宗  
 房。た。ま。一。は。その。風。又。何。人。で。よ。ま。北。吹。あ。り。一。が。柳。り。眼。ま。器  
 て。次。歌。集。を。撰。は。是。の。法。徳。が。一。百。五。十。年。七。百。許。稍。法。林。我。難。ま。ん。と  
 す。る。根。は。一。尺。ゆ。遠。一。松。律。の。風。骨。を。探。り。山。家。集。北。寂。寥。我  
 た。ら。り。は。一。函。玄。空。作。人。情。の。理。屈。を。離。る。は。れ。が。正。風。室。小



大成して天下後世まどりく（たか）惟徳中興の太祖と稱譽せらるるも  
宣方依りお押（し）ま北邊是乃（し）海切を依（た）藤公傳記の彩戎伐王  
水子之河ひ千幸（せん）茶苦（ち）一太案にのく（し）倉生戎源度する（し）  
等とやいおん志（し）小尚（し）す（し）一（し）支考（し）あ（し）れ（し）接（し）と（し）せ（し）ら（し）う（し）

模本其南

板本の母才空角之竹中東照（し）子あり未と源助（し）とる（し）一射の神田  
控玉（し）池又（し）恒（し）きり（し）儒戎（し）宮（し）の（し）秋（し）先生（し）小学（し）び（し）医（し）を（し）予（し）の（し）何（し）某（し）は  
戎大議和尙出を佐玄龍画戎英一掃（し）小借りて多能あり何の  
以ありり（し）意（し）つ（し）ま（し）の（し）く（し）冠首（し）より（し）晋其南（し）ハ（し）易（し）経（し）の（し）文（し）一（し）て（し）室  
晋其南（し）米（し）希（し）が（し）祝（し）の（し）鴻（し）する（し）北字（し）有り（し）一名（し）操（し）合（し）晋（し）子（し）は（し）く（し）雷  
桓子遊川とも画名莫子といり（し）里（し）程（し）雷（し）嘗（し）程（し）而（し）崇（し）六（し）病（し）庵（し）善（し）裁（し）店  
文合店等北諸号あり（し）を（し）性（し）と（し）る（し）や（し）板（し）返（し）り（し）と（し）る（し）と（し）拘（し）ら（し）に

後改  
燈室

酒を飲（し）ぐ（し）を（し）礎（し）と（し）る（し）戎（し）又（し）依（し）る（し）一（し）方（し）一（し）或（し）日（し）小（し）寄（し）付（し）文  
北會（し）延（し）小（し）仍（し）合（し）を（し）人（し）く（し）苦（し）心（し）一（し）ける（し）戎（し）前（し）を（し）傍（し）ら（し）小（し）碑（し）碑（し）一（し）柳（し）き  
居（し）り（し）己（し）ま（し）一（し）妙（し）句（し）短（し）あり（し）こ（し）起（し）何（し）ぐ（し）ま（し）く（し）い（し）ふ（し）仰（し）見（し）銀（し）河（し）底（し）と（し）柿（し）  
冠里公室中（し）北（し）令（し）小（し）金（し）樽（し）あり（し）て（し）銀（し）樽（し）あり（し）如何（し）と（し）戲（し）ま（し）り（し）と（し）  
答（し）々（し）金（し）樽（し）あり（し）て（し）流（し）玉（し）あり（し）ま（し）き（し）が（し）ぬ（し）一（し）と（し）生（し）行（し）智（し）大（し）累（し）出（し）の（し）類（し）あり  
貞享中照陣町（し）一（し）居（し）戎（し）後（し）す（し）破（し）笠（し）が（し）池（し）一（し）嵐（し）常（し）と（し）ち（し）小（し）回（し）居（し）せ（し）り  
と載（し）と（し）る（し）と（し）此（し）法（し）あり（し）或（し）方（し）あり（し）一（し）巻（し）の（し）点（し）を（し）巻（し）に（し）収（し）め（し）き（し）ん（し）後（し）  
返（し）して（し）回（し）く（し）此（し）巻（し）何（し）あり（し）小（し）初（し）ん（し）なり（し）我（し）附（し）巻（し）戎（し）勞（し）する（し）に（し）返（し）す（し）は  
連申の先（し）祭（し）又（し）後（し）す（し）一（し）と（し）仗（し）是（し）紙（し）ふ（し）く（し）巻（し）を（し）交（し）え（し）り（し）扱（し）点（し）料（し）も  
返（し）して（し）ん（し）や（し）と（し）の（し）答（し）々（し）料（し）ハ（し）石（し）傍（し）又（し）收（し）束（し）あり（し）と（し）返（し）す（し）一（し）も（し）い（し）と  
を（し）り（し）一（し）今（し）時（し）人（し）の（し）徳（し）也（し）方（し）く（し）を（し）力（し）も（し）亦（し）く（し）て（し）四（し）下（し）一（し）古（し）人（し）也（し）酒  
落（し）く（し）撥（し）一（し）風（し）種（し）戎（し）驚（し）了（し）甲（し）乙（し）を（し）立（し）ると（し）同（し）目（し）の（し）後（し）あり（し）ん（し）や（し）昔（し）







日や船院どのの教れいろ「恩まれくおぐらある人々の塊はれ  
 正交を以てするもの」文を以て横はし「おす様く不眼前風標  
 人西く云はる能はず」云雨や家哉同く鴨なく俊爽又が如  
 「夕涼よくも男小生れりる雄枝倫を」「橋妻や時めハ東りか  
 西乙園が三洋の什是は出るに似たり」声くれて積れ齒か一客の  
 月或輝すく今令此子後交於詩何減李王与澁宗「益盛  
 子て夢る」交婦り余「名月や夏はく人小松の軽」冬來てと  
 鹿野小こぼる鳥り奈空縦横句在る月屋一「文能借の松蔭  
 翁与此子也一朝不可論尽去る後人阿るひの思へらく晋子  
 調異師翁三殊不知離而合者有り蓋一「支考許六の程年儀備  
 多く空作思を焦一「壽哉索世といんども意符此操陽晋子  
 自放ちるに及ばげるるや遠一

服部嵐雲 附烈女

服部嵐雲ハ澁別小坂並村小右生に幼名久る助或は湯崎長尾  
 久若助を此雲の子とあり長里で東武にお杉庄長尾云小住ハ何  
 又井上おお公も勅とる一「そはは産を世といひり一「年君  
 侯の信して我第小坂里井の端又寄く足濯んとするに年一  
 言く此雲り愛の障来る成んく「武士此愛で米とぐ愛く赤こ  
 越さ口すさみ一「まふより業成難此本小抱く山色を赤まん  
 とす志一「共く一「歳祀を以て居宅を退の日常御衣類  
 雅意等よいらるる一「赤色手に携へて居候と一「並唯一「  
 風家とて小深ひ出いつり「蕉つり「拙く能名を治助といふ後  
 嵐雲といふるハ嵐此屋の富方とてりと思ひ寄ける思さ今交  
 改んもおかほ一「と笑ふる度く有り妻此名を列といふるも







行

大正四年  
九月廿五日  
仙家奇人談

行

行

大正四年  
九月廿五日  
仙家奇人談

行

仙家奇人談

卷之中



嵐高れ切なりと神寂の文は祀せり初り  
 此種阿婆後り雪申庵一不白斬玄峯堂と号せり  
 雪千山を埋む什麼孤峯不白斬といひ  
 に漸雲才丈へ登す巒石御あり  
 少間て云く玄春望別送乙片語今秋帰来相見了也即今如何是  
 行脚眼と答て云く觀音境裡古窠樹少いはく窠無古今色作麼  
 生無古今色の一句割進ぐ云く春色無高下花枝自短長少是  
 を領して休玄と号稱して冬堂成退記玄居と号す可笑一死  
 後阿り玄妻唐猫を巻する子法よるるり割法てそれ融成  
 巻す法も種阿る片一人石に増する交物器物いむべき日  
 小も坐看杖喰すふたごまうといひ思てと此を改はり  
 或日書此他形杖幸ひ溜り猫を巻す可まう一日書は取り

束く雪ふ雪そ此の才を知らばと答ふ妻泣叫く悪幕  
 小と切なり一猫の妻いりある君此奪ひけこかちつん地  
 悪くちまぬ隣女をとり小生作杖告く猫の形先を語る  
 妻大り恨く交ぬ教いとみ争ふ一人打寄法させて割  
 公哉和らまごりや睦月はト免の交ぬいけりひを人く又  
 笑れてと踏出ると恨ぶ杖石あやち月板此玉を祀とへ此  
 時哀る小と有り日一とせ重陽の詠り芙蓉の菊その  
 分此名いふく色り友晋子深く感して我生涯業此句是  
 及ち此と坐あり己よ業此業杖少ふ老阿まが少の公業や  
 此詠と此句あり外と濃は至一とあり生老作老成少  
 集中小置くも亦何と分んや一元月や睦て夜の抽く  
 不言祝賀還在其中一蒲團着く寐くも夜や東山壁言嘲の



句雅一廿什温厚和平實小平安の素を依りて「君不や  
 まいり」と量れ捕足見其莫逆「吾佐一亦能身ハ瘦又けり作  
 里獨活」意又風うらく来て嗜幸酒此泡「竹の子や思此園公  
 起の美也」梅一輪一主人程の暖くは「沢浮のふりり」  
 り亦一初秋好ん動きぬ纏すこれ皆以て足見其正風「其  
 年山竹井戸小宅を求く久く恒せり時一室永田年十月  
 双足兼又十有四辞世一禁ち依咄一禁ちる風此止為又園  
 取の忌市ハ人園竹又換け園竹是成吏登又傳ハ後世此の下  
 風了浴する者亦多し主使すこ大なるはや

向井玄来

向井平次宿い前の抱抄此人幼あり思又後く洛陽に居り  
 往年蕙門小のく玄来と姓名す主風極富中と並そ先

一 兼ふ屋一蓋一尚時莫以初の魁あり一奇形山崎と羨く  
 小忌夫とて「劫とも刃えで細く」男く一許中此来ぬ家  
 れを撞ちり「玉擲の奥奈つ」や初に龍「尾尻の公元也  
 満氣く家「荒破や走王別多る友子る抄符死して後抄成  
 作く以て生流小使里に生性若流切ちる皆人の知る所なり  
 其舎を居材と名く「陶瓦破れ又其舎を壁書して回く  
 一 我家北能湯に遊ぶ屋一世の理屈をいふべりくは  
 一 物文くく「精を成思ふ」一魚を成思ふハあふは  
 一 迷く「灰吹をす」屋一「烟草を嫌ふ」ふを阿ふす  
 一 隣「居居成は」一「火此用ん」ハ「あ良」は  
 いと風流く「て可笑」一「支考」が「飯日記」の「玄来」小「烟管成  
 掃除するの癖」あり又此を好み隣者居居といふるあり



是と此屋交す此与平といへる若少者食子成送りる所京  
里二時一室永元元年九月死に産根の許六その係を作  
曰く略多り里一財あり流る居す弓矢成擗て十五歳と略  
たのい十五年先此此合々三十年末大居士何の法ありり  
先少慈母又思く風種此名小言ふり京少小如あしく諸  
子の院一産す南苑を築を押一東此風成獲す累益  
此阿正風作の暇を帯此湖抄水まけ里ろろ五月雨とや猿蓑  
の櫻を蒙く不易流りの巻成おち後孫の彩風と略ても終  
萬玄若細みをと忘まは一本杭の地も二流片ぬ時あり赤子親  
や玄雀の十文字とを申りり又何水の仲秋一や岩窟や室  
小も獨り月此室二派して先少此年を驚りし厚賞叙の才一  
古少の飛逸に極里た少放く一代の飛逸と一友句持る人

けく構あふる一此を妙とい略一叙句に及一り二十餘年  
彩水の内つり里暖味名落材舎よ少をむりく石山の幻怪  
房よ考を付ふんざ一深くをこを難波の愛成まで途  
體を解た義伸奇此築も肩衣小潮淋を擗ふ死後の  
憐成堅く身里諸生成ちつけ初人を柱く越の流化  
智く有波難波の虫を選一略此卯七成助く波音を佳  
むけ程我大程一力成よせく文選序考れ一人進み病  
床小却ても三夜旬他の虫を家一何ある意つ滅亡  
月月了や何里りん去年のあし仲越の院家夢ト玉ひぬ  
今年衣交若文章年す秋九月この郎去く子と紀足と  
ぎ此思ひをけせく人若揚成影るるや下果又支考り之流  
材先生の挽奇何り流一略



仿史草

借文字を先代に尾陽大山の幸は有り幼より学成好く倭  
 漢を究む躬く河く港母小はく孝人たり才を生る所をれ  
 は家成ゆくりく生を慰む嘗て右の指小痴つけ刀此柄持下雜  
 一と酒り壯年武成粹一と種を宗と成生時の口號多年負屋  
 一蠅牛化做蛄喻得自由火宅最惶涎沫不偶尋法雨入林紅勺の涼風  
 一とまゆる成雲れ若くふつふ法華経を演説するより他は  
 一とつふ何事以てやる為門と遊んぐ附く異我併みす一我を  
 波瀾此述一拓着う家一取本やや拓本代抄はる名中一取靈  
 毛中一板此世の極言極り余一有明一板向ぐと記すく一と  
 立く一取の家もちり重りり隨言句をその作を可於家水  
 元年二月に千二歳一して此世成る家友人去來縁成作く

因く今茲如月来此日月の竹苞は残る物く一祥沙身はら  
 里ぬと湖南の正秀が許より知はるる日小推ふはぐ里洞  
 止矣う縁ぬ津久ぐとけ人成むり一我思ふは尾張の西  
 生れ亦山侯に仕く一勇猛其名も有一とりや一日お意  
 一人を借一竊一君父の家成悪び出送の傍小懸ね一  
 きり雲滯又引替らぬる中累活名史邦又ゆる里五兩亭  
 に仮寐一先少小身く神らぬ一あり二五此板帳の中  
 小取を柄一並くは百の火傳のよと面成片一向て吟舎に  
 母く此人を鉄に先少成云ふけ借是道に進み学は  
 人成よと立んる月成紙屋くはと成とありそ下地  
 の馳起る子美むと一統くも性善み学ぶる成成其  
 感有りて吟ト人あやしく傳すたけりお忘とる如

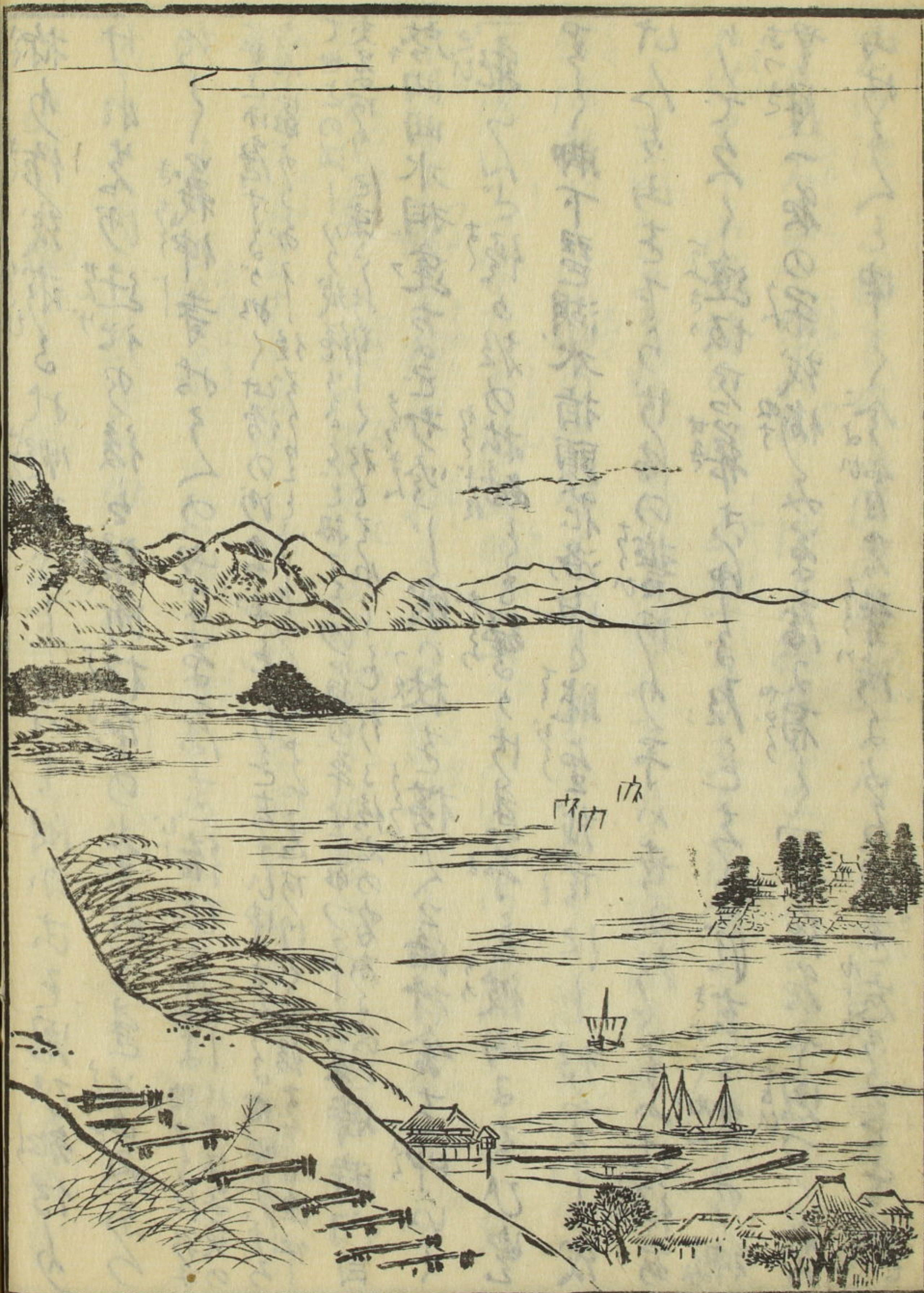








結直  
二頁





斜あつに交りまゝ小雷鳴地と云ふに吹風塵をはあちけ  
 水の虚空欲努閑是空満山雷雨震寒更と興トおられ笑ひ  
 照してあまぬ身妙と我啼々々はうふと嘆え一雪集れを  
 毛再乞形免ぐり今むちう一記名妙み残まら白九十年の笑  
 い三年此形不化一雪悟る百年名然を生す惜ても程  
 ちく此一句成手向く来くと涙来成信を信る妙と云記  
 名まきく喜や三年の生ゆれ

森川伴六

森川伴六は江島彦城此士一名百仲字羽菅師と云阿松と自稱  
 了居成五老并と号にふき井小四徳河あり一草字藤原二  
 小揚揮豆毛徳備云云雲花墨波村次四一紫芝岡野の風雅の癖あ  
 るもの栗田の文と知るる人を成り敏達と云く徳文のふ長きり

又画成能す意存も画と云く沙と云く一能得ハ成る子と  
 素はと出けり生能句まとい興せり一本箱と成屋記桐忠若  
 菜々今夕飯の妻此は信や帆け船一口又月のお波さ浪や子  
 規一竿と死装束や古用干一着純此万を招龍忠盛り哉一欄  
 杆小堂るや菜此乾法沙一初霜や浪承江文若人公一嫁入のつ  
 色るたり津多、此沙翁歿後多此送愛の櫻樹を伐く尙像成  
 刻み是成大津の智月尼一僧る生文ふいとく

此康成若にせり持子おはせり此より一曰お交存の指若るのいすこ  
 す此と云け存の像も皮延引け度存も手小柄れら且云又  
 を并此古本とて刻みすゆらせり兼て大ちも像刻之度金  
 フダしてても初集あくとけむぐくく人粒又は名中のふ像  
 十月三日 素の像像く流屋に集もた一 伴六



智月尼様

生恩遇の海老を忘まげるる事初此如く惜むるも晩年癩瘡  
 重しうして人小面する事あり適道代官人と存取來る人可也  
 とも屏風を去死すく違ふと成許は後一年金塔の菊子い  
 と川で對面せん事成れをむいうて屏風代官人やと病床下  
 迎へて飲酒おれよぶる事殺刺唇うけ居く奥氣苦くたり事  
 子ちうく多て研破ちうく破りうく後金合も片是バ病何んく  
 事す悲念子小隠きりも一度菊子小お見えそ落し懐さほ  
 風推し控ての大丈夫ちうくうと樹人洋し合休とと正徳五年  
 小死後後寫の場す一時打破屎糞壺芬や臭氣供梵天下後  
 死ぬる事そと思ひしお上手も死ぬる屎上手なり此子終身  
 已息が成代句後して化を寄蒲物と思へりあり平生の海老の  
 後申一ト話お記く入るもの我れみ方里こ言ふまじり彭老後  
 まで膚摸おれ目逃う片もの伊家此一奇物と稱すべし

東总村支考

支考を考渡おれ人は一免後若小のく徳義主といしり一ハ弱  
 冠の冠より吹毛羽也春三月彭揚牡丹花下風といつる傷成作て  
 宗つれ子信り末粒も安ねもろる東於武寺の大会小頭嚴嚴  
 講まハケ條の荆棘成能同にあり法春を先を妒み違りし  
 後機を控きた里とや嘗く勢陽山田より身成置り何う何と  
 風家に親み交る時り一涼着その方成惜之能借を勤く蕉つ  
 入しむ功成く飯口すといの見龍といの勢又隠るく此名白蓮蓮  
 二を飯又飯る所して及の存るる事三吸の鼻小をるる或  
 梅花仙人名稱あり坊号成東華西華と唱るハ何方一道逆



才條の備なり時不在に盤子と呼ぶ家又在さまの獅子老  
人とのふ交考己のく入舊名ありを字二教に涉り又文成  
以く句及す著す取十論古吟抄等ありと確編ありを後  
句と評てハ亦与洋の魯衛と政身一序校と脈や加よひて梅香の  
灌仏や目出と起る事小古はあり「惟子の形を安し淺又百」牛呵  
声小晴の月夕あり「蕙ん古よ存の世で綱代守はしめけ子僧形  
成替す僧徒をきて居る里の政一衣鉢を解の公起る時  
置此禁小便すればは舍利の系中比肉食ふとの校後有りを成  
法例いす一免く懐陸陸をば事せりちるは牛とあると一と  
いつ々に答く「牛不在る合点をや招標夕すみ一牛尾の巴  
靜と傳説一傳りるこて著名は後一舟一乗るなりぬはしと去  
此尖をまきぬといふと額をくく此石字傳美の重較る小又ごり

雲雀の妙唱する如く「笑えく洋くたる法よと書き交  
ぬほぬき捨やも及ぬ風宗古り靜村此聲中成叩い  
一勾何る屋一やと答ふ答て曰く古人も宗不達を唾する  
といつり初十かちる変ゆくハ句按此聲す保揚は何る  
今何才一宗里とも高里と一附をまの長陸す保す人  
と實不送成ほく人の控中をありと評と感とてはま  
閑た里とくや喉争はくと在まへぬりく通る「云年成後  
る時小尚川く空風を慕ふ者多く後世連綿して流る  
一派成唱はく是中と此老が徳をくずや

曲翠 附幻住老人

曲翠 賦と曲ハ江妙撰詩の士く馬指堂と号は細紀より意つ  
不遊ぐを老手と稱せりる「念入てあうらる蒼む山茶ふ思ふ



夏秋浦つゝ居るり蟾蜍「了可る声と枯野の嵐多子或年了  
 深川菖菖房此終は付ゆく「菖菖小沼河らひ一以やこれ後  
 ら此回勅旨我氏市日若君寵を以てより上中壘壘して  
 如らばるるも重王後中多くも此の爲る「苦めらば  
 る計つ終く我家へすりー入息悲喜我責く殺害一を身  
 公ま月り小句殺してつり風流此名を知るれども忠誠の志ハ隠  
 れとりの事破流ハ和弁成能一且菖菖紫紫の名手方り破流再  
 照といふ句をさるる菖菖此名小附一も欠探名名も歎きあり  
 修徳村人又その修徳幻位を人此閑寂を樂み一子菖菖修徳  
 此地了全雅方る夏秋知る修徳村は秋穂も此の如く名家と稱  
 一川に

修徳村

修徳村ハ清州村人素家富有なる一りども後志と分る一嘗  
 て修徳門又遺遺して修徳の狂若と修徳風雅を修徳人修徳人  
 畧に生海破生菖菖不風雨成凌ぐ性く修徳の吟あり  
 「水多やむふ此者く清ういつい長ぞや若根若松風流い  
 らや「修徳山のはふいむふく小妻う系一時あけり走入りり  
 晴ありり途中菖菖根をさるる修徳に地は成多く回く吾  
 子修徳す一修徳六水成修徳一修徳山此句を修徳隠して  
 天狗集と名けりり其後の夏多里り修徳一修徳一修徳一修徳  
 「名と利との二川三つあり月子修徳修徳一修徳の如くいふ  
 あく此のそを投逸虚世おのふ修徳一一年西風り修徳の時  
 修徳修徳く小志ある人あまも立修徳ありりり狂修徳修徳  
 修徳を結び肩成綴るる修徳を修徳修徳一修徳の修徳を







元王秋氣零落此言後速多体たり初め箱六出柳陰射了核  
痛の多代休くいと膝くうくらひ「愛る柳」あるも我も膝を咬  
ちご派ドて立出らる一年元が口号「後吟」房の標よちりるくらり  
「折角」己解「ぐせよ月此雨又武財」梅が香や分入る里を牛北角  
といつる名句も何ぞ

秋之材 附 李東

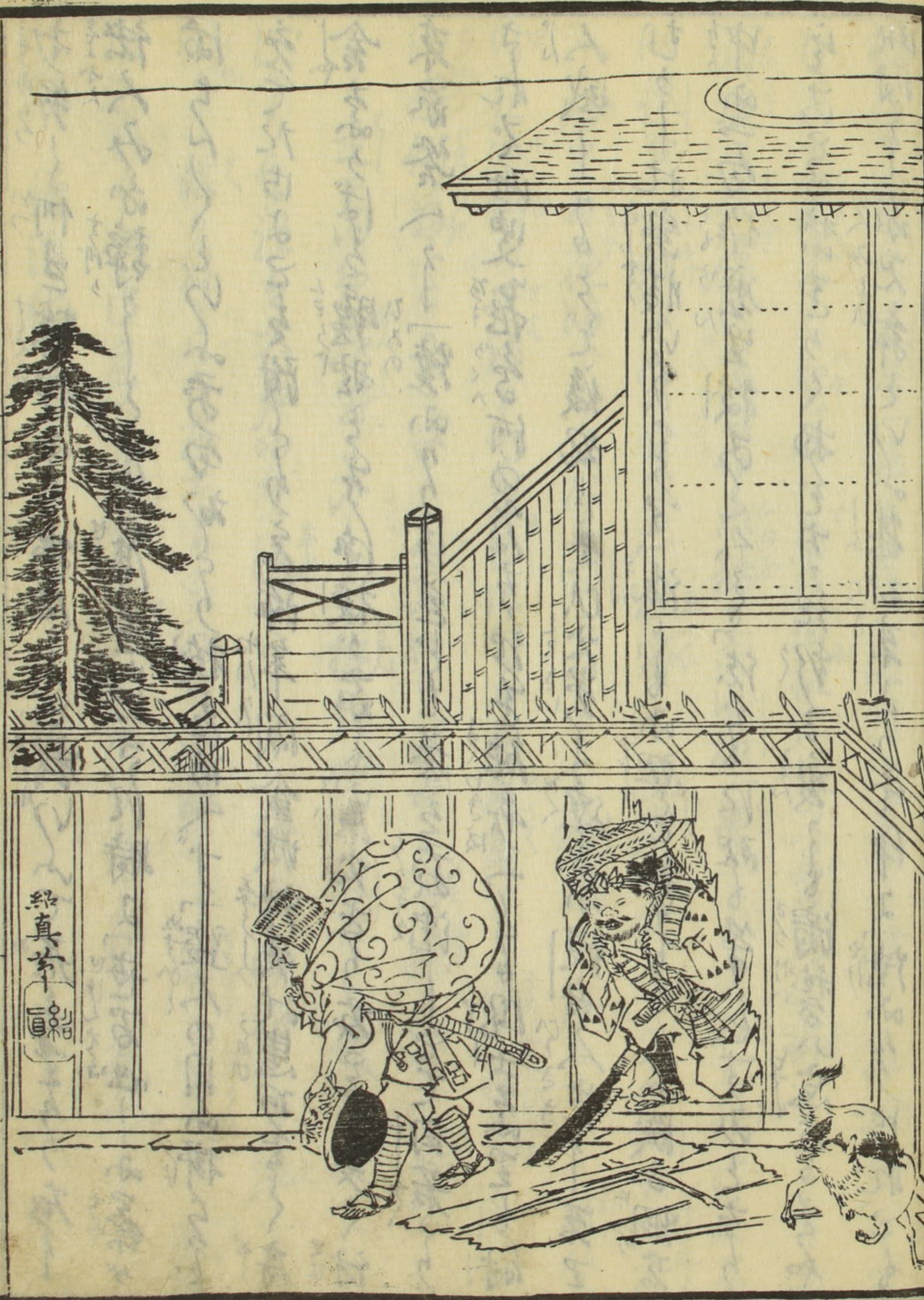
秋の坊と金塚小名言は風俗名隠士たり「凍」つ記を凍つきふぐら  
盤北風ちどい「つる香派」もあま「武財」妙子湖南の幻住房「材  
い高」小沙箱の「我高」を改名小「記」を馳走くふこて「一夜二夜」の  
飯を味を許けま「が村」も透世此身おればとて「芝」は「迅」生のも  
いと懇ろ「物」澄「麓」は「尺」送り「屋」がて死ぬ氣色ハ尺之は襟  
此声と一旬の「波」海小立お是ぬお「海」ましく「交」遊の中も「柳」枝

群了情あり「や」が「何」も「物」法「漁」その「事」ありと「娘」申「何」も  
尺之より「箱」水「玉」形「柳」の「足」代「屋」すぬ「柳」枝「等」も「菊」面「何」も「又」例  
此申「おれ」お「沙」多「人」を「沙」ばりりも「昔」は「里」を「坊」で「お」箱「の」寓「舎」  
一「海」りり「強」白「法」士と「合」合「す」れども「柳」枝「を」云「す」は「坊」で「懐」ろ  
氣色も「赤」り「里」ハ「柳」枝「と」氣「色」赤「り」を「皆」感「ド」け「赤」り「り」  
又「赤」沙「り」海「玉」の「法」音「屋」障「く」本「末」末「身」も「小」三「衣」一「神」高「お」  
室「と」氣「色」法「凌」屋「江」手「限」ち「因」く「菊」子「此」許「人」處「を」包「と」て「言」け  
れ「ハ」内「す」り「下」代「能」ぶ「了」物「打」荷「ふ」人「を」恋「し」き「菊」子「も」「一」色  
け「ハ」内「す」り「下」代「能」ぶ「了」物「打」荷「ふ」人「を」恋「し」き「菊」子「も」「一」色  
杖「踏」里「越」し「も」嘗「て」の「風」人「を」宴「す」清「室」を「自」居「し」死「後」了  
米「浅」ち「ど」多「く」残「り」ハ「ハ」の「め」も「養」し「申」し「ける」を「終」焉「之」西  
月「四」日「あり」兩「友」李「東」材「以」來「里」孫「白」物「體」も「子」は「此」如「材」回「く

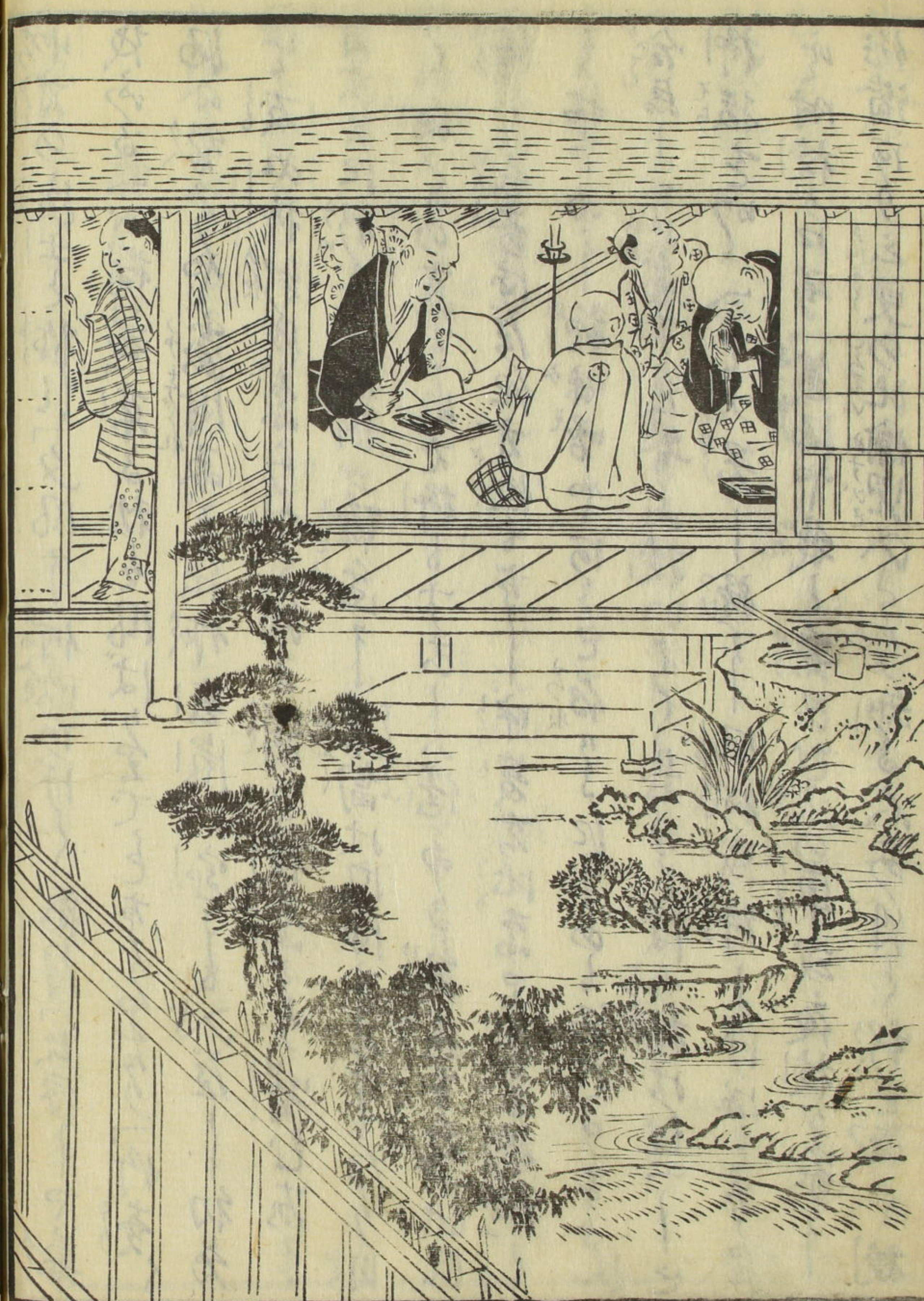








紹真筆





打笑く何ぞ殊掃ゆと出だす一と戯いふて居ぬ里よりあり  
 諸人みお静しく生席を山原さし時よ「世百吐一ふ茶ッ  
 浦ちんくといふお句おらり枝を河へず「盗人の目お掛ら  
 免でた由よこそ附くりえ深年別金城燈失此患何ぞく房  
 舎をふりばる暖炉とそ依枝が家も黒火ざり友こそ多く付  
 束家答へ「煙ふりりけさども益をな脱一とて自若り  
 された世更飛鳥河のたき記を能弁つく日風土ふまると時  
 人感一うると後始とらび火災く連る小後吾人先へ東里  
 むり一此案情いりてとて「法とも不厭と等もすみと成る烟  
 申ふ一句作麼生枝あこく「法もに不厭も等もすみとちり  
 空よこの世をさりくおどち記新る愛も清静もハ忘けるそや  
 此阿一お入舞といふ集お来りり中よ「煙ふりりけれとも

櫻けりぬうち支考「梅が香や海川一裏へ煙火存牧童「うた  
 ひはも笠をく笠れ小屋の屋根北枝又雪清小掛りく奇仙  
 「杖提の祝儀に系らす水懸りか水枝「曇りすすれぞ和此曇  
 時後終「坂裁る人の笠きて杖寄く支考脚或手の人後若病床  
 一在里日夜浦りりたる友を望とて枝まやみもちく付ひ  
 けり犯湯粥の世結やでも為たうらる鬼角する中疾篤「ト七  
 治療術をうりて笑く文おゆりは吉が命終ま望と笑何そ  
 下く走しゆ記強家よ入く金権杖叩き後吾く我を捨てと  
 ばりり生流と大声おを泣いごりり掛了と此種うち絶うらハ  
 別へ嬉しく初め小織り一樂も奇舎く感  
 たるりや片目を平生此変思ひ居るれくちりり

偽浪化



信濃化と東の豆一如大僧正の蓮校山にて越中并波瑞泉寺  
 此位職より一年蕉翁此推情をささぐりて或夜をそりて  
 落科舎小て苦面して少才の所望我波む此多きを其自づ  
 抵波山集りも此志のたてしとくそえぬを予と一ことと思ひ  
 ぬき中我瑞すと記せり生一坐此夕我何りめて必廟集り必  
 多入を鼻唇此声や雄上川一半子の身みもちて時ぬり急  
 去付や抱り接ふ出の小口え深十六年壯業して夜に  
 鳴呼ましといふ

信千那

信少千那と江為巽回本福寺の十二世一法名我成武上人  
 とのふ嘗くく月くく彌蓋材と号に生性鋭悟敏達甚く意の  
 此地禁と稱さくく一違改めるとゆふはや初接一替れく此能  
 形や梅柳一言灯笼をるハ物う能極うか京保八年一寂は七十  
 有三歳あり

小川破笠

小川平助ハ江戸の人性多能うて画と細子長せり能名宗  
 字は一の高言と後い後意門小遊ふ業若う至一附の句に  
 妻小もと成人おりの小標特生身杖傷うとく杖接小疎まれ亡  
 命するも子殺度或附本骨此山中又此法よひ入里篇るつ死亦  
 ちく行跡小倒ま体一衣被まか破果く既ふと竹此子笠を  
 かぶ里身とと糸笠一枚被はとい食小を饑たりれバ一食  
 形とちられぬ按山子うかち吟して名我破笠と改らるるあり  
 其より江戸へ帰る晋子小寄富虚栗集よる食の句何のくし  
 するは己年久しといひき後志家まりて津軽家へ出



食福を垣より延享四年ハ十餘葉一して死するといふ

諸通

諸通之何れ所の人をさすはと我知るに若くは一以叔父の事なり  
院より人をもふ計あり一我為存道にけし抄の時道出傍らう物  
いひふ骨風傳の後小及ぶ幼知より好み一掃形をればとて一そ  
れ有残麻へ出て翁小豎に虫も穢くして一落とるる浮世  
を福の傳をさすはいづれも是れ村をあらはし一翁歎して曰く我  
まだ君家へ侍く一時活の季吟の奇抄を叶記後傳をたす  
後身一今ハ徳信のみどりけり小遊ぐ生涯は余みとに抄我  
小後く萬ふと一と沙才の憐ふくく生より諸通の名をば何と一  
らまらる一山椒の幸く皮をさぐはせよ一いぬくと人ふいられく  
年法當抄を福け抄を濫すで出さつく一因ふを河や海書

此此秋北志一遠ふるや何とく姑く沙才忠中絶らり此れ  
とも存後馬の足々又生罪を許けり此より為存抄けし  
画がみつゝ出依所をり終るに或虫小義仲寺ふて亡抄道  
傳の時此子大津の使客残傳を生席を好くといひ又傳  
丹れ鬼妻同ふ一何とく奴那曲をせし一と記さるハ大いなる  
誤りより翁より撰所の曲水一選す又虫小色

諸通より大坂小く置俗い多一たるとのるや生んは一と  
年以翁より尺く来る夏ゆく今又教く小是ら尺とて  
刑に徳園の真徳を感す一くいつて平生此人ふて以常  
此人が為成るや成ち尺一何の不審り有るや拙者一  
於く不慮はるはトくい俗よ高望いても風狂の助け  
ちりいせんハむりの乞食よりハ翁王可中の



二月十八日

おせ銭

曲水撰

摘風尼

伊賀別上踊り摘風尼といへるは河風夏が女にて同族  
 友回氏へ嫁するといふ交死して後雅歌に倣書を以て宋  
 ころに意門北よ手なり空秀派と云え一の名月や力これて  
 後りる掬ばいら生瀧宏句我撫々本禁集と名く世は仍れ  
 す惜む危し菊いすゝお口小生く忠たつらま一時衣裾志  
 世活ふと交らまらうとや後年深川の席へ使して倣書  
 といふ物を指すなり文意はを記置き候ふに制せし物投書  
 して右の肩は一寸をうまみどり記振あり東痛子不し  
 生風家おと歎奈し

智月尼 附乙別

智月尼は江州大津郡若人乙別が母なり親子とも風雅をハ  
 おおんご意舞我沙と云一年乙別が東行する我送る  
 「わげとさ人尺ふゆく旅を不ニ此寄嵐茶を憐く」  
 来去回しけり摘すめ「茶を」手え危す免を依し本  
 れで丁を命惜ちま様堂身此老衰をうとちく「我形も衣  
 小尺ゆる杖形ふ智月一海山の香角を門る香吹うお「昼の  
 昼する此衣を依冬にうお乙別晩年此尼沙ふびり川く紙  
 筆残備一帘子の袖に合せし我り形尺と威厚き物出そ  
 残し五人とをむ舞臨取らうも六十ふちう此尼小形尺  
 を乞まきいと力ちしと戯れふら出て突しとをふまき  
 沙の死期をあらうとめ計し知水りや浪巻よりその愛



我昔来りしも今年此より来りし

經居松風

經居松風之江戸村人その身魚家として遊る夏里といへども  
 生涯耳龍耳の夏里一兄仙風と世又蕉の弟遊ぶ宿歩を  
 号す「柳灯此夜に強ふ」松字「うら」なりと接神の齒や秋の  
 風「葬」やを日く「の意」此出来「け」著も又撰り「一」同  
 子「沙海深川」又「唐」撰むするは「此」奇殊小力を辱せり  
 と「なん」一年毎に送別書句又「何」となく「是」吹風も「哀」あり  
 素裳「水」を「降」して秋も「や」冬も「休」や「作」者も「ま」るに只  
 朽りふるの「深」なるんといへり「王」或出「沙」此「歿」後「六」の「人」支考と  
 絶交せ「依」り「祀」す「大」なる「妄」誕あり「牧」臺の「巢」川「篋」集  
 小松風より支考人の文出あり「雪」河といはく

悪くも「と」ま「せ」よ「う」屋「う」候「く」に「い」づ「も」我「と」吟「ど」  
 我を慰むば「う」り「い」は「た」り「は」た「り」し「一」面「手」此「中」に「と」  
 進「若」は「向」我「清」中「ゆ」く「有」屋「を」い「以」て「我」を「福」著「け」り「る」  
 「故」此「す」孫「と」達「者」の「死」ゆる「復」の中

聖享保十八年八十餘歳にして死せり

野坡

高家野坡之越此「あ」妙「の」人「は」ド「め」江戸「又」遊「び」後「浪」後「に」位  
 十「標」本「社」と「号」に「蕉」つ「唐」流「小」附「合」の「体」撰「依」る「も」此「人」と  
 然「ん」に「孫」の「依」者「なり」こ「ふ」堂「我」向「お」こ「妙」亭「り」子「親」能  
 此「出」生「ぬ」橋「子」り「家」長「松」が「親」の「名」で「本」家「に」受「り」系「一」は「き」掃  
 際「し」て「う」山「茶」家「小」り「り」一「は」は「の」垣「高」ゆ「ひ」る「や」神「去」ぐ「れ」  
 或「夜」盜「る」の「影」も「悪」く「り」坡「お」著「し」て「云」く「我」一「抽」の「行」く



ふー唯葉一竹ささめ一壺りや夜はむけれは柴打焚く  
 んよく冥後すべしと塗るふづれなるは彼世うち海つ  
 松よす一草席此も公我通れおと踏出ー我席の極  
 巨竈一腰里先と何るを足つ事何のさるやと家小坡  
 糸く此や一答ふた何るが今日あの存極も句作を向く  
 祀やと坡すおのち一垣潜る雀をらなく書れ強と塗た  
 感しておゆ起けりや生人を成り扱きさる此の如しを  
 後先妙の望名席を言津時小極一匂ら言津時の存と  
 祢甘りの望年壽杖さるは

紙智紙人

紙智紙人の尾陽獲珠位す舊ワの老才有り「尺取目バさる」  
 い原一夕の辰み一棟名木の斗里す起る若葉か「茶をさる」  
 植替らるも牡丹か「稗の穂れさる」  
 江戸ゆくを菊の句兄弟といひ出我美して残人が送別  
 れ句一「夏と死の公座すはよ秋葉枯葉といつるに「夏時  
 は風と秋まほけーの花と春ーうと此人の涙小く及ばはる  
 沙羅も色を軟さる情去ー「沙の波拂は佳し傳る約  
 何る一何る一「誓公此志と覚るうりーや若死女おごか入  
 きー子も有ー我孫も此終里何らばるも我憐く後の如  
 舞心之生言り家玉の辰何とさふ久味を成りー我後時  
 一落陽一思ひ切る時猫此意さるかさちりり沙も此慟懐をや  
 よみーけん後の櫻集は此句我が加入何るーとと毎と君子の  
 懐む所あれと又此危る一底を起もさほーはまを此妻  
 瑞成叩く生福を知れよまを色を世人の風流さるはーや



嗣及して後着流の支考先妙の愛忠清菴有れ傳ふごとく妄言  
を播く生世松撰り虫多くおして古式を塵一世人我欺ける  
とて古了怒里不猫館とのみ虫を著しく洋行し生極を森  
せり實に我屋に流切ある清深の士とて世變のりちるべし

涼菴

涼菴と夢河山田の在位しく津宿あり蕪の折んを乙由  
と名流等う良堂友舟河さひの神風録と号す一筆れも懸念  
を懸念あり今昭妙も一淋げげく何すお多や極意を極意  
織一難一あり一梅有り後一橋あるが極意なり此句老成を徳  
大勢れ身小可極りくる曇くお一身の上流只去舟水りぬら  
をそく世空り邊記をえんと極妙一筆履を記くおて極ら  
は人そくく存ぬ一むるに不河とらず菴を在取の意より

直了思きく流北東山一ゆ紀生より極妙流す昔の極意  
しく又うりくと終小長流後でたごり極一と交々實  
我我雅人と稱すべし一老後危き小たせんかつ人松よ  
にまよ里辞き我乞ふ菴眼を并記て一合息をや生何ら  
きれ子親と云つて又探之し一暁の生を依るやと再  
極の意吹ゆ乙由くこつ小存く此初又極何のこつかひ  
や何らん生流北松字に言極又極り里け延ば首水争我流  
極せる時極き小息を絶た里り一出り一世り我極つて  
痛症生患く死せりと極病中の吟今極で八人が極むと  
極りひ一我身好う人ふかくの社会と極極法なるを極  
以てつ流又極

首良



前良之信所後浦の釐なり一とせ東武又逆ぐ蕪つ又入里  
 一時小名河り一ぼのくと鳥居むや雲北妻「果有や」  
 孫山一垣百尺のはおおちふつと根亮ふふ水互尺及と河急の  
 市北は又按ずるに雲の細道より前良と後成屋みく侍集國  
 長崎といふ所小ゆり里阿れは定づけて初と有る一ゆ記して  
 たふま休ともそ秋有る又いそぐゆものそ然み孫るもら  
 勝み雙友を危のあて雲はほすふが如く一と北河河急は河本の  
 難情思ひ屋依屋一控る成或之兩人北越の山中とて所志  
 桑小遠引列れさうといふ大ある誤ありり若孫集  
 海城ふての吟も「たぐみ休て紅一ぼは汗拭と急集もてと  
 とは志の程まうは

系回字古

系回氏能名守古和別郡山北重屋守り少小あり難情人  
 延より是小博東歌言古人物はあひに通るるも或時人  
 打寄玉梅の題いごとて紙叙句せよと少北材の云「妙子進  
 中く「定うけの急の手扱や高宮梅を」  
 後變じそ蕪つ小入取久享中少孫存時小控つる時その言  
 に津島して一日松玉と三津北奇仙阿り  
 歴代とある「あるの記も失くさるる」後胤種屋の  
 ぬり抄ゆる集人歌く「雲ありそ」  
 屋城思ふの志海ゆして左津の比邊は是つ船借れあ高と称  
 うは少志疑後「もそ進慕他小吳たり孫の筑後をやりて  
 こそあきて「大方お小意せは梅の急けり里津川へ居く「西つ  
 竹北村あや高の江急人清々一面急志はひく梅北桑桑く系  
 或の「鳴千鳥た死あ北雲騰見その程う一つむく一殺く捨ふ



蓋面黒

豎一尺四分

四寸



三月月銀泥

粟穂及葉苗

加無致

伊家音八言

卷之四

十一

頭陀箱付  
貞享年間意翁蹈首  
此之途道過  
郡山而止於宇古家十

蓋裏

袋持水衣切



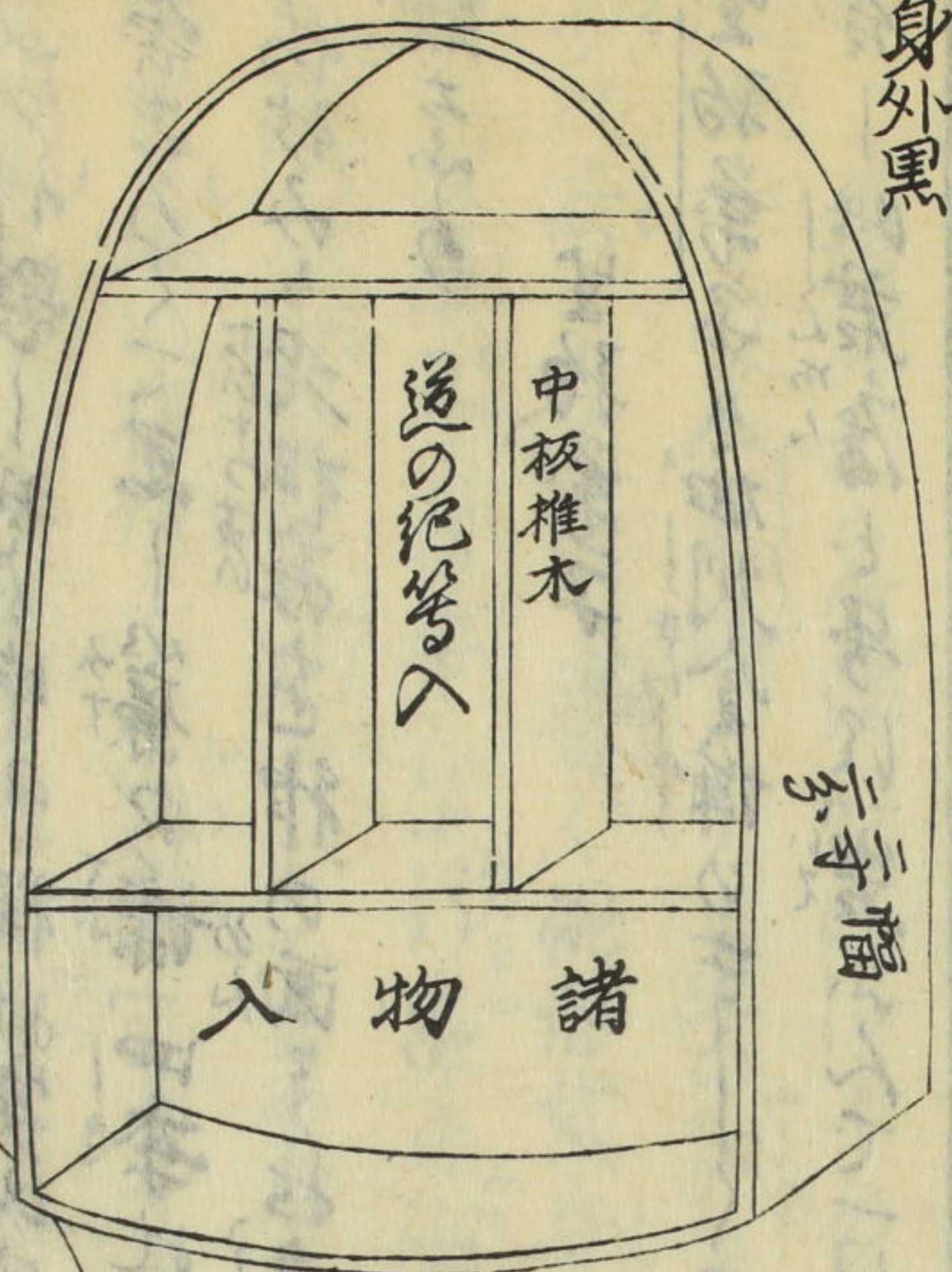
竹青

斗寸寸寸寸寸

件目与弟子杜國有  
三  
依之能滑于時  
翁賧別錄此一物  
有深秘石室云

身外黒

四寸



中板椎木  
道の紀号入

諸物入

後有故遂為  
正正康士有僕嘗行  
而得摸之跡  
火止く丘兵乞為与附屬

怪控者必同

焉今依其家紀以減生  
借來く正尔

儀伴采人



朱青黄銀泥  
雜色

軸葉凡青

非家音八言

卷之四

十一



落禁く系生玉情たのひけさるべし或年たらるる「身ふりて梅  
 け久日の念仏うまふ又或時清少納言といひ出雲宮にまけけん昔  
 ちりりた梅いとあまして「虫千や梅花をと虫母の年或去りて  
梅のハ一句五花をと空ほましく「冬くの念花又ぬむも梅  
 神佛仏の三教成と官れく「并れ破るは縁の芽管く酒井一又回  
 文の什夥し梅が中ふ一梅此実山の木は名や身名楽は「年  
 葉まろくて思し簾の障四季此景月あらず来つ池れまじ  
 「梅たみり老松存を祚の面く此造作身中なるる大紫らの  
 類なれり

生駒系子

生駒系子と加判金梅のまじりて家世く富り意氣と女と  
 若し此君唐と号に「岩ふんで一日くの梅系「香梅ま月

加ふる梅系元禄の法はドめて舞ふ面一「面回く沙ハ  
 法正了「万人充滿」道の法正度足ぬ屋一我今あり才  
 介此友とちりて普く能借我守護す人」と盟約せしと  
 系より後年翁再びひ行跡の砌り金梅一立寄れ一「此  
 豊後く至里を遠けるを久屋了獨里得馬小築河てを  
 江我慕い松任く「追附くりるの饒とて必衣を二月金三  
 方片一おす翁とそ志者厚初を感んせら梅梅るに金泥ハ  
 望我意の嫌方り三様一申されぬ又此後秋に材急  
 廻を救い或を風流此主とあつて加陽一「強人我遊一む  
 友小蓮二村も世人家友とそ怒あましと妙子抱狂小を記せり  
 世り「系子我意つ十指れか」く及を支洋等と傳りる  
 三はより「系」えくるハ大いふる保里あり本招文澄小梅の



友一子素崇有り之載あり

知足一家

知足と歩海法師人慈翁と交り海一之居我叔照房  
地蔵亭と号す一志意く風流有り或百姓の二男三男それ  
く小仕立くも後居小中きりる句「路を河果報く」一志  
寂居ふ又「く風や吹袖吹く寂心」知足の子父此志我  
徳く千手掛を著し「徳なく一夜く」夜を重し「蝶羽」松  
根小多代茂河屋くも此系ふ知足母「里かよひいこりあや就  
伴隣母妻「公系」一徳つこれ居雲の蝶羽女志子

山口素崇

山口氏之江戸人為ふ和漢此出を嗜く詩文を吾に若母  
依く至孝あり人何るひを妻を従んる成すくむ事を固辞

して居みぬ是秋のふも遠んる成忍れいなり等実の君子  
軟弱すく一弱冠あり季吟窓つ又遊く能道此達者とい  
つる居此名を今日といひ又來書こも素崇といつるもその  
別号あり後又或主家茂辞してあり海川の別荘に遊  
池成地里交友を集く晋北惠達を遊社に撤せしあり能  
あり「吾ら社中と稱するは是此等又依てな里句ら吾社よ  
類すは句「池小精赤」一飯名く能習ふ柳くなま作み赤言為  
茶種「年」もや「軍」ちりれつ「後河」旨す能ぬゆや月名  
十三夜「孫」多樹こは「は」と家や鈴鼓舞人「小」捨灸せし  
「目」に「書」禁山ほく「ぎ」は初「川」河豪快おと「可」見享保二  
年八月七十五歳して歿せり或人慈翁と能得たりとい  
んと官ふ唯死せりと答られし「さ」なりは「ま」は箱と此雙此



交際おれり多し古人の風阿里くいと素つり一統るに今時の  
人招り断金成とあつて文小ハ冠髻言れ如く吳越を障る  
援成扱するを百と有し嘆息するに録有り



能家奇人談巻之申終

*[Faint, illegible bleed-through text from the reverse side of the page]*



